



美教委通信

平成26年度
第19号
H27.2.15
発行
美祢市教育委員会



「教育委員の窓」～永富 康文 教育長～

現在、歴史民俗資料館で「幕末の動乱の中、志半ばで斃れた美祢市ゆかりの二人の志士～廣岡浪秀と来嶋又兵衛」展を開催しています。廣岡浪秀は池田屋事件で、来嶋又兵衛は蛤御門の変で討死、または自害しています。池田屋事件や蛤御門の変で多くの人材を失った長州藩は、会津藩や新撰組、そして一時は薩摩藩に対する怨念を滾らせ、また、志半ばで斃れた志士たちの思いを受け継ごうとするエネルギーを充満させ、そのことで明治維新は成し遂げられたとも言えるでしょう。

当時の夢多き青年たちは、武蔵の国に生まれれば新撰組に、会津の地に生まれれば白虎隊に、そして、長州に生まれたことで奇兵隊に入ったのかも知れません。ただ、その違いは、どこに生まれたかによるのでしょうか。

変化の激しい時代の中で、己はどう生きるか。大きな歴史の流れを見据えた上で、生きる道を選択することの重要性は、いつの時代にあっても変わらないものだと思います。

私は、てんばやき！

2月14日（土）美祢市民会館において、作家高樹のぶ子さんをお招きして、美祢市民大学講座を開催しました。300名の来場者があり、高樹のぶ子さんの作り出す和やかな雰囲気会場は満たされていました。

作家として、妻として、母としての喜びと苦悩を赤裸々に語り、作品に込められた作者の思いを知る機会となりました。「光を抱く友よ」での芥川賞を始め数々の賞を受賞した作家の内なる思いが伝わってきました。

「私は、てんばやきです。」、恋愛について語った際に高樹のぶ子さんから出た言葉です。「てんばやき」とは、防府の方言で、お節介やきの人を指す言葉だそうです。人に関わらずにはいられないお人柄が作品を生み出す原動力になっていると感じました。

てんばやきな高樹のぶ子さんだからこそ、作家として自立できるまでは、子どもと会うことができなかった母としての苦しみと作家としての厳しさを知ることができました。

作家の内なる思いを知り、もう一度作品を読み直してみたいくなる講演会となりました。



高樹のぶ子さんへの直撃インタビュー

Q 「防府市立松崎小学校卒業と聞いています。小学校の思い出をお聞かせください。」

A 「小学校に入学して直ぐに、桜の絵を描いたことを鮮明に覚えています。桜を桜色で塗ろうとしていたら、担任の先生が『本当に桜はその色ですか。桜をよく見てごらん』と言われました。先入観にとらわれることなく、自分の目で物事を見ることの大切さを学びました。」

Q 「若さの秘訣は何ですか。」

A 「還暦を過ぎたら、誕生日を迎える度に、年が一つずつ少なくなっていくと考えています。気持ちから、年をとらないようにしています。」

※高樹さんは、還暦から9年が過ぎています。とても69歳とは思えませんでした。



廣岡浪秀と来嶋又兵衛

美祢図書館の入り口に、「幕末維新」コーナーが用意されており、高杉晋作や吉田松陰、来嶋又兵衛等に関する本が並べられています。今年は、明治維新のきっかけとなる大田・絵堂の戦いから150年を迎える節目の年です。先人の思いを知るよいチャンスです。是非、手にとって御覧ください。

また、前回お伝えしたように、美祢市歴史民俗資料館では、「美祢市ゆかりの幕末志士～廣岡浪秀と来嶋又兵衛～」と題した企画展を行っています。



資料館の2階に上がると、奥の部屋にそのコーナーがあります。廣岡浪秀と来嶋又兵衛の自筆の手紙や漢詩などが展示してあります。特に、来嶋又兵衛の手紙の文字は、伸びやかで力強く、又兵衛の気性を表しているかのようでした。

お時間があるときには、是非、御来場いただき、幕末を疾走した2名の志士の貴重な資料を御覧ください。150年という年月を超えて、彼らの熱情が伝わってきます。

学校安全・生徒指導連絡協議会の開催

2月3日に、美祢市民会館において、関係機関、学校関係者、PTA役員が一堂に会し、学校安全・生徒指導連絡協議会を開催しました。関係機関からの連絡事項や学校地域への依頼事項の後、「発達障害の理解とよりよい生徒指導のあり方」について、子どもと親のサポートセンターの主査榎本文二様による講演を行いました。

子どもの特性を知ると、関わりが変わるという視点で、行動の背景やできる条件を整えることの大切さを具体的に紹介していただきました。一人ひとりの特性に応じた指導について学ぶことができました。



編集後記

折に触れて思い出される、書物に書かれた一節があります。それは「人と人との間（例えば夫婦間でも）に『敬』と『慎』を回復することが急務である。お互いが自分に及ばないものを持っているすばらしい存在であるという感情（敬う気持ちと慎しみ深い心）を忘れてはならない。」という言葉です。

私自身、つい、感情のままに考えを押しつけ、家内や我が子から指摘を受けることがしばしばですが、他者への深い共感性を心に刻むことについて、あらゆる場や機会に思い起こし、なにげない行動の中に表していきたいと思っています。（I.T）